

私の好きなこの一点 そのエピソード

現・会員によるページです。

自分にとって重要な作品、転機となった作品、好きな作品を一点選んで、それについてのエッセイを書いています。

近藤 大理

月岡芳年(月百姿より変奏) 破窓月 ダルマ(達磨)は南インド、僧侶の最高位 パラモンに生まれ仏教の正法を伝えようと中国に渡り、面壁九年の座禅の行を納め、禅宗の開祖となった。翻って私などは画道半世紀以上超え惑いの螺旋、齢の自覚恥ずかしい限り。畏敬する画聖葛飾北斎は迎える90死の間際に【あと10年、せめて5年生きることがかなえば真の画工に成れたものを】と嘆いたと後世は伝える。比して東京展には発表の場を借り未熟な画工の学究画業の私の遅々とした進展歩みを進められ感謝に堪えません。



「芳年月百姿より変奏(破窓月)」アクリル画 24×27.3cm 2023年

平山 延子

平山さんは東京展草創期から出品されている作家である。会計を務めていらしたこともある。ここ数年の作品は下地に花の模様などを施した上に、コンテらしき生々しい線が大胆にうねり、空間を二重構造にすることでエネルギーを引き出している。自身の心情、こころのゆらぎが、繊細かつ華麗に『風』となって表現されているようだ。(田所一紘筆)



「烈風」ミクストメディア 83×75cm 2019年

ミト五十嵐

ミトさんは、多くの絵のタイトルを『想作』としているようだ。一見するとゼンタングルの手法を取り入れていると思われる。それはアメリカ発の比較的新しいメソッドで、禅(ZEN)とタングル(絡まる)を組み合わせた造語である。ただ、ミトさんの絵画はよく見かけるゼンタングルとは似ても似つかないくらい稠密で色気がある。見る人を無意識の万華鏡的世界に引きずり込む魔力がある。恐ろしい作家だと思う。(田所一紘筆)



「想作」ペン画 80.3×60.5cm 2019年

中島 紀子

中島さんの絵は身近なモチーフを哀切たっぷりに歌い上げている。もう捨ててもいいんじゃないか、といった物まで捨てられない、といった風情である。そのモチーフたちひとつひとつに歴史と記憶があり、きっと家族の思い出もたくさん詰まっている。旅の記憶もあるだろう。いつ見ても心がキュッと締め付けられるのだ。見る人のスイッチを押してくれる絵画だと思う。(田所一紘筆)



「いつか外へ出ようね」ミクストメディア 117×155cm 2019年

本多 陽子

いつの頃から絵を描き始めたのだろうか？
どうして絵を描こうと思ったのだろうか？
多分、、、、、、 現実逃避、戦い、自分自身の戦争 そして未
来への夢と希望

そんなところだったのかも知れない。

これからは、時々、昔
のことを思い出しながら、
のんびり、ゆっくり
絵を描き続けたいと
思っている。

自分自身の戦争終結に
向けて 明日はきっと
良い日になるだろう。



「War myself」

山田 裕子

当会への出品はまだ日が浅いにもかかわらず、記念誌掲載は
とても嬉しいです。というのも最近の作品はインスタレー
ションで、展示が終われば素材に戻ってしまい、写真しか残
りません。自分だけの記録ではない記録誌という時間に、作
品がとどめられるからです。インスタレーションは時間と瞬
間の芸術です。消えていっても、何らかの痕跡を見た人に、
時代にそして自分に残
していこうと制作を続
けています。今後も時
間を、次元を意識しつ
つ制作して行こうと思
います。



「祀り」自ら染めた布 麻ひも 綿

松尾 多恵子

この作品は、ケニアとタンザニアで出会ったハタオリドリ、
タカ、カンムリカワセミ、また庭にやってくるメジロ、オナ
ガなどの鳥たちを想い、やすらぐ自分を描きました。彼らの
息吹を感じていただけたら幸いです。初めて東アフリカに旅
行し、広大な自然公園で猛
獣たちと共生する野鳥たち
と、いつも家に訪れる身近
な鳥たちに対する共感を覚
えました。幼少の頃から共
に暮らした動物たちとは会
話が通じていたような気が
します。動植物の住みやす
い環境が保たれますよう祈
るばかりです。



「Meditation」アクリル画 90×75cm 2019年

明輪 勇作

第46回東京展は、運営委員諸氏を差し置いて私一人が展覧
会係を担当しました。こう言うと驚くかもしれませんが。実は
第46回展は「幻の東京展」と呼ばれるWEB展覧会だった
のです。当時は新型コロナで大多数の公募展が開催自粛で、
東京展も世の流れに従いました。その年に描いた作品が「晴
れる」。コロナが晴れていつもの日常が戻って来ることを願っ
て描きました。ちなみにその年の運営委員会はすさまじく、
上野公園の野外ベンチ
で、マスク装備の参加
者7名で密やかに堂々
と行われました。今と
なっては笑い種の一
な本当の話です。



「晴れる」デジタルによるフリーサイズ 2020年

ユキ・オリビア

これは私が3歳の時に描いた人生初の油絵です。上野動物園
でゴリラ舎を見た事がとても印象的だったらしく、家に帰っ
てからもゴリラの絵を何度も描いていたようです。
父親はその様子を見て私を絵画教室に通わせました。この絵
はしばらく教室の飾り窓に展示されていたようです。3歳の子
が描いた油絵が珍しかったのか、譲ってくれと言ってきた
人もいたそう
です。父親お
手製の額とよ
くマッチして
いたことが懐
かしく思い出
されます。



「gorilla」油彩 SM サイズ 1955年頃

渡辺 修一

命の輝き、力、営みを武者の姿で表した作品をシリーズで描
き続けています。この作品は騎馬武者を描きたいと思い、鎌
倉時代から戦国時代の日本馬と馬具を調べながら描いた5作
品の最後の作品です。時代は戦国時代で日本馬の特徴や馬
具、戦国時代の鎧などの武装
を凛々しい女性武者と共に楽
しんでいただけたら幸いです。
背景の月はプラチナ箔、槍の
穂先は金箔を使っています。
箔は朝夕の自然光の中で鈍く
輝き、心に響く色でもありま
す。日本画の色を大切にしま
ながら、命の造形を描き続け
ていきたいと思っています。



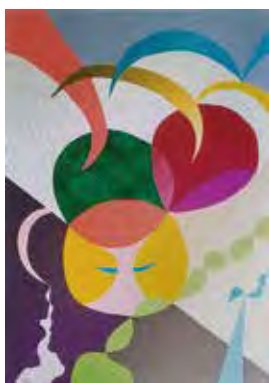
女騎士

渡邊 光彩

2016年1月から作品をナンバー付けしてから今日までで、No.311になります。今回掲載する作品はNo.302です。4月春になったので、制作しました。

装芸画(布象嵌)といひまして、布を和紙で裏打ちしてから絵具として使っています。まず、トレースの紙に下紙を描いて、それに合わせてカットして、裏側を5ミリから8ミリの和紙のテープで継ぎ合わせます。

私の絵のテーマは、気功・元気の『気』です。赤い布の所に手を当ててみて下さい。気のパワーを感じると思います。



「気 No.302」装芸画 2023年4月

香山 文代

毎年、コザクラインコの絵を出させてもらっています。実は飼っているのは1羽なのですが、私の生活の大きなウエイトを占めています。始めは文鳥を飼うつもりで鳥屋さんに行ったのに、一目会ったその日から、一目惚れ。それ以来、コザクラインコ一色の生活です。日々の生活の中で、その時々にな気になる物、樹の形であったり、道の形であったり、といった物を取り込んで、コザクラインコと一緒に描いています。この絵もいつもの家の風景です。絵を見てくれる人に、少しでも癒やしをお伝えできればと思って描いています。



「コザクラインコのいるテーブルI」油彩画 F50 2023年

松田 久美子

2018年東京展に出品した2枚の1枚です。

ある暑い夏の夜8時頃、庭の月下美人のつぼみがどんどん大きくなり、12時には真っ白い大きな月下美人の花が開き、あたり一面花の香りでもともかぐわしくすばらしいです。朝になるとつぼみのまましておれてしまい散ってゆくのです。

私は子供の頃から病弱でしたので、月下美人の一夜の命のはかなさに心うたれどうする事もできない、激しい気持ちをたたきつけるように何枚も描きました。カマキリとかバッタとか大好きな卵は夢につなげてみました。



「ENERGY」アクリル F120 (1940×1303) 2018年

万代 進

高校3年生の時(1962年)、十勝岳大噴火を目の前で見た(北海道旭川市の自室窓の真正面に見えた)。後年、スペインの荒々しい風景の取材から、北海道の風景との類似性を感じ、北海道の取材にたびたび出かけるようになった。ある時唐突に高校3年の時に見た大噴火がフラッシュバックし、それを作品にしたものです。

この作品を契機に、小学生の頃、宇宙を勉強していたことが無数に湧き出してきて、その後の私の大地・宇宙へと意識が変化していくことになる、その切っ掛けとなった作品です。



「北の大地・1962年に見た記憶・咆哮」墨・アクリル 162.1×387.8cm 2012年

菅野 秀樹

庭のカラーの枯れた姿が気に入って3度描きました。1月27日、2月15日、2月27日。

最後のやつが一番マンに出来上がりました。手慣れて上手くなったからではありません。モチーフが良くなったからです。文字どおり「枯れてきた」からです。

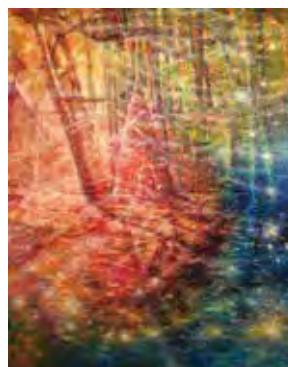
次第に枯れてゆく姿よりも、枯れきった姿の方がもっとカッコ良かったのです。生きものを描くときには、そのタイミングも大切です。



「カラー」紙にクレヨン F10 2022年

塩沢 かれん

この作品は、私が幼少期に住んでいたオランダにある風車と水辺をイメージして描いた作品です。風車のモチーフ自体は私の作品によく登場する重要なモチーフですが、あえて主役として向き合い、描いた思い入れの深い作品です。作品の中では、風車の羽が回る風の心地良さや水辺のどかな空気感を色彩や光の描写で表現しており、背景にパイプオルガンをイメージした造形物を描くことで荘厳な雰囲気も醸し出しています。いつまでも私の心の中に残り続ける思い出の景色を描きました。



「Windmill」木製パネル、油彩、アクリル、アルキド樹脂絵の具 F100号 2023年

山川 信子

コロナ禍の影響で、2020年東京オリンピックをやるのかやらないのか話題となっていました。結局は一年遅れのオリンピックでしたが、新しい競技も加わり、その中にボルダリングがありました。若い女の子がとても逞しく軽やかに登っていく姿を見て感動しました。その感動を絵にしたいと思ったとき、ふとイチゴを思いました。美味しそうなイチゴの山を、つぶつぶをつかんで登ってみたい。きっときっと楽しいだろう。そして美味しいだろう。



「ボルダリング」きりえ 841×594cm 2021年

ちかこ

この作品は、「目」であり、「芽」であり「女」であります。貼り絵というジャンルの中で糸（レースヤーン）という素材にこだわり、一本一本張り続けていく、誰も使っていない表現方法だと思っています。長い「目」で全体を見渡し、最初は「芽」のように小さい。女性は「芽」を大きな花にします。また、私はユーモアも大切にしています。



「め」貼り絵（糸、レースヤーン）A2 2019年

遠藤 和枝

50歳過ぎまで生理学を学んでいて絵はただ眺めるものでした。今は、不思議、すごい、と思う気持ちを描こうと試みていますが、説明的な絵になってしまいます。海のどこかで生まれた1個の生命体が分裂増殖して、やがて膜をもつ細胞が出現、更に集団を作って生きる細胞があらわれました。人間を形づくる細胞も集団で生きることを選択した細胞です。細胞の大きさは約10マイクロメートル、細胞膜の厚さは約8～10ナノメートル。今は人類の時代だそうですが、人を含めて生き物は海の泡みたいで心細いと云う気持を描きたいと思いました。



「今は人類の時代」アクリル画 100号（130cm×162cm）2022年

照井 康文

2008年からデジタルへ移行してから、暗室はパソコンに変わり、より多くの撮影を行い、多くのデータ化された写真を捨てることとなった。フィルムから開放された写真表現は大きく変化し、自由になった分、不自由をも知ることとなる。時代の進行と共に写真は世界にあふれ出し、個人情報、肖像権など、より、気にかけるなければならなくなった。

この写真は大阪、あべのハルカスの展望台で撮影したもので、合成されています。白黒とシルエットによりイメージ化を表現しています。



「Phase 230816003」写真 2023年

八木たあぼう

2022年に奨励賞をいただいた作品です。東京展に参加するようになって以来、東京都美術館に展示できるのが誇らしく、東京展の会員ということで満足でした。そんな私の最終目標は「いつか何かの賞が貰えればラッキー？」というもの。ところがそれが望外に叶ってしまい、とても嬉しかった反面、ここからは私には険しい？と今は思うのです。私の目標は何か？それでもますます東京展が大好きになった私。だから、やっぱりこれからも東京展は私の大切な居場所です。



「レースクイーンさん」アクリル画 93×63cm 2022年

川崎 知容

2012年に本格的に写真を勉強しようと思い、写真教室に入ることにしました。直前に写真教室主催の江の島を歩く撮影イベントに参加しました。江の島を満喫した後に鎌倉高校前まで行き、逆光が綺麗なので「露出を極端に上げて撮ってみましょう」と言う先生のアドバイスの元、撮影された1枚です。この頃はハイキー調の「ゆるふわ写真」が流行っていて憧れていた作風が自分の物になった喜びや、これからの教室での学びでもっと上手になれると言う確信を持ってたきっかけの写真です。あの頃の写真への情熱が今も続いていることは幸せなことだと思うのです。



「江の島と私と」写真 A3 2012年

アヤコイサカ

「都市に森を」が私のテーマでもあります。鳥たちの住まいを壊し、CO2を吸収する木々を切る、経済優先の伐採はやめてほしい。



「森は鳥たちのもの」アクリル 20号 2023年

高木 絹子

東京展への参加は2012年。「磁石を自由に動かして遊んで感じてね」という思いで制作。私のマグネットアートのタイトルは、『磁在遊感』。私の思いもよらぬ形へ変化していくのが恒例に。「作家の主体性がないものはアートとは呼べない」とのご意見を賜りました事もあり、2016年の作品はある程度高い場所に設置して頂きました。最終日まで形が存続。この作品で奨励賞を頂けた事はとても感激でした。今も【自分の名前+写真】をネットで検索しますと、この写真が出てきます。この作品は、私を応援し続けてくれている気がします。



「磁在遊感」マグネットアート 90×150cm 2016年

束田 薫

ここ何年か「天空への祈り」をテーマに制作している。F120/3枚組の作品で、地上での戦禍、コト禍、自然災害など人間に降りかかる脅威をなんとか鎮めたい。天空への意識はXPIでガウディのカラタ・ファミリアを見たことが大きい。構想の大きさ、天上界への畏怖、内部構成の見事さを「天空への道」として第43回(2017年)東京展に3枚組で発表。それ以降このテーマで人間の野蛮、強欲、略奪などのダーク面と本来の清涼感、純粋さ、明るさを祈りに託す。そんな思いを込めた本作で34年目にして東京展賞をいただきました。



「天空への祈り」油彩 194×391cm 2023年

金井 路子

50周年おめでとうございます。私は2000年頃に1回と2016年より東京展に出品させていただいています。その前は他の団体に出品していました。東京展の「自由な精神・自由な表現」がよいと思いい出品させていただきました。この作品は、2022年7月の日本橋中和ギャラリーでの「金井路子展」に出品しましたP80号の部分です。アクションペイントの要素を取り入れて線を描きました。この線を上からのせることで画面に動きが出てきて、風が流れていくような表現になればと考えています。



「INFINITY- 宙の彼方へ正面」2022年

秦 加奈子

ある日の情景や時の流れ・空気・光・色彩など、自身の混沌としたものなどを織り交ぜて、色彩と形で画面に構成しています。



「時-2023」油彩・キャンバス F100号 2023年

北條 松枝

この作品は2003年に会員推挙された作品の一枚です。9年間の義母の介護が終わり、2000年から東京展に参加しました。さあ絵を描こうと、筆を取ったものの、何をどうして良いか分からず、そんな時にあるベリーダンサーと出会い、華やかな衣装、曲線的な動き、異国的な雰囲気につきり魅了され、夢中で描きました。



「TSUDO(II)」油彩 F100号 2003年

後藤 紀子

木版【彫り】【彩色】【刷り】の行程で意図していないもの、その偶然性が生じる意外性をベースに、ルールから逸脱して遊んでいます。この作品も、自分のイメージ、世界観を具象と抽象の間で、自我表現できたらと思い制作しました。



「KAKERA」木版 70×90 2022年

松沼 孝

大型貨物船のアジアンシンフォニー号の船体が流され防波堤に激突。痛ましく破損している情景を何事もなかったかの様に、遠くそびえ立つ釜石観音だけが見ていた。これらの光景は2011年3月11日に発生した東日本大震災の悲惨な情景の一部である。私達一行は、3ヶ月後の6月、釜石を三人で訪れていた。ひとりは一級後輩の地元の歌手である。釜石と深い繋がりがあり、50年前に有線放送で「釜石の夜」が大ヒット！ 目的は現地の落ち込んでいる人々を元気づけようという慰問でした。そして昨年、震災からの復興を願い釜石市役所に、この絵を寄贈しました。



「釜石の夜」F20号 2010年 油彩

影山 あつこ

十数年前から その年で私が強く感じた社会現象をインスタレーションしています。

この作品は新型コロナウイルスをインスタレーションしました。壁面、床上をすべてCOVID-19で覆いました。

私は 平面と立体の作品を制作しています。

平面は ハート型のキャンバスに絵を描いています。

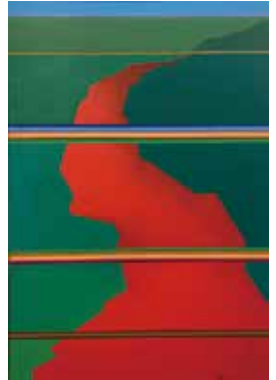


「新型コロナウイルス (COVID-19)」幅 5m 奥行 3m 高さ 4m 2022年

結城 貴代子

千曲川は甲武信岳を源流とし、長野県から新潟県に流れて信濃川となる、日本一長い川の長野県側の名称です。

私は、川がまだ生活と繋がっていた頃を経験し、高校生まで千曲川上流地域で育ちました。その千曲川を作品化するにあたり、川は直線を使い抽象化し、源流から日本海まで流れ続く威力、迫力を表したいと考えました。そして、周囲の豊かな自然環境を表す空間。横線は故郷の温かさ、人々の暮らしや文化を表現しています。恩師の故杉田五郎先生からも、故郷を想う心や私自身を、「千曲川」というテーマで表すことを勧められたことにもよります。



「千曲川」油彩 130.3×194cm 2023年制作

飯塚 藤子

「O&Q」は、私にとって大きな転機となった作品です。2006年、視力障害が進行して細かい描写が困難になり、悩んでいた時、2歳の孫が絵を描く楽しさを思い出させてくれたのです。80号のキャンバスを前に、木炭をにぎって迷いもなく大胆に大きな丸を描きました。丸から手足が生え、福笑いのようにバラバラな目、鼻、口。満足そうな笑顔の孫。それを見てインスピレーションが湧き、描きあげたのがこの作品です。

この絵をきっかけに、私に見える、感じるものを色と形で表現しています。



「O&Q」油彩 F80号 2006年

穴田 利孝

昔の事を思い出す時、ジュークボックスから流れてくる音が私を優しく包んでくれます。



「NOSTALGIA 5」イラストボード 515×728mm 2022年8月

石井正樹

山梨県立博物館 大化石展 展示作品

映画ジュラシックパークでも馴じみのヴェロキラプトルだが、実際の姿は全身の羽毛の痕跡から鳥類の翼に似た前肢持つ羽毛恐竜と考えられています。

材料 / 新聞紙・工作用紙・画用紙・紙ナプキン・針金 (洋蘭線・フラワー線)・ドールアイ・木材

ペーパーモデリングアートは粘土造形や彫刻では表現が難しい、鳥類や恐竜の羽毛や鱗まで精密に再現することで、学術的・芸術的にも高い評価を受けています。



「恐竜〈ヴェロキラプトル〉」立体 ペーパーモデリングアート
全長 180 cm 実物大モデル 2014 年

藤倉 春日

自らが置かれた社会の中で、
花は 何を見て 何を思うのか
花に寄り添い 花の思いを感じ
絵筆に託したい



「明日へ i」F50 墨 2023 年

塚原 克孝

植物を素材として使ったり、ドリッピング、事後的な加工を通して偶発的な意思によらない造形を頼りに作品を構築しています。作りためた作品を元に組み合わせ九相図になぞらえて具体的な何かから抽象的な何か、現実と虚構、現世から異界といった境界を表現しました。連作で一作品で、この作品はそのピースであるため、別の展示では別のタイトルとなります。



「九相図(五)」アクリル、ボタニカルマテリアル 91cm × 91cm
2023 年

松屋 桂子

この作品は 2011 年に美術の祭典・東京展で奨励賞を受賞しました。スツとした数珠玉が美しいと思いました。秋の終わりに咲いた一輪の朝顔と、落ち葉と柚子と一緒に描きました。冷たく澄んだ空気の、秋の色合いが気に入りました。私は身の回りの草花の自然の色や、形に興味があり、それにとっても魅力を感じます。人物も好きで、描いていて、飽きることがありません。これからも、自分の身近な自然や人々を描いていきたいと思っています。



「秋の終わりに」72cm×72cm 水彩用紙と透明水彩絵具 2010 年

菊池 美砂子

40 年経つのでしょうか学生時代、パリのサンジェルマン通のアンティークドールショップで 1 面に並ぶ沢山のアンティークビスクドールが忘れられず、フランス発祥のビスクドールの技術を習得し、再現に傾注しております。2016 年から東京展に創作を出展し、オリジナルビスクヘッドを作りたい気持ちが強くなり、このヘッドが完成しました。焼き物特有の失敗は多いビスクですが完成後はアンティークビスクドールと同様、永遠のものとなります。題名の「ルーチェ (光)」は家ねこの名前です。第 49 回美術の祭典東京展奨励賞受賞作品



「ルーチェ (光)」ビスク、粘土、布、紙 130 × 130 × 70 2023 年

石原 啓子

若い時から具象作品をサークル活動で描いていました。10 年前、友人の絵を見て楽しそうと思い、すぐ描き始めました。

私も描けるかと思っていましたが、最初は具象から離れられず、なかなか思うようにできませんでした。でも描くことが好きなので毎日毎日描いているうち楽しく夢中で過ごしました。

この作品は 5 ヶ月過ぎた頃に描いたものです。この頃は小鳥ばかりですが、とても気に入っている 1 点です。



「自然」A4 2014 年

堀部 和子

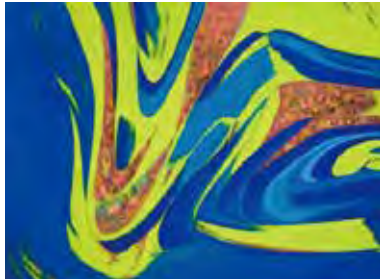
住まいの近くに川があって、折に触れながめる機会があります。

その流れを見てみると人生にも似ています。

揺れ動き、さまざまな形に変化していくさまを自身の心もように投影させたもので、ここ何年か、私の創作のテーマになっています。

この作品はコロナ全盛の頃に描いたものです。

閉じこもらざるを得ない閉塞感の中で明るさをもとめて、やや装飾的になりました。



「流形」油彩 F60号 2020年

飯田 俊人

メキシコに滞在して制作をしたことで、だいぶ肩の力が抜けてきたと思ったのですが……。帰国してからどうも思うような作品ができないのです。そして回りに暗い出来事が続き、大震災も経験してますます不調となったのです。

そんな時、開き直って描いたのがこの作品。シンプルな色調で、デフォルメ・抽象化した生物など……。何かから開放された感じです。長年関わってきたいきものたちが、目覚めさせてくれたのかもしれない。まさにその後の「いきものたちシリーズ」の幕開けとなりました。



「Buenos dias (おはよう!)」平面 (アクリル画) F30号 2011年

本多 裕樹

古来より地球の生き物を育み養うのはこの星の神霊である。その神霊は男女合一をもって一体である。神々が主と崇めている陽の意識の父なるテラ、陰の意識の母なるガイアはあらゆる存在の発展と光と進化を促進させる。人類を養い文明を見守っている。あらゆる生命を生かし、ただただ愛するだけで、人類の罪を許し成長を促す。たとえ愚かな人類が大地を汚し水を汚し、自らの生きている地球を壊そうとも、それも成長と思い涙を流しながら耐えている。人類はいつ、この親なる神に気付くのであろうか。その存在を思い、この絵を描きました。



「地球意識テラ・ガイア」油彩 M80号 2015年

佐久良 桃花

この作品は、2020年度生として武蔵野美術大学に編入し、2022年度卒業制作展に出した作品のひとつです。

奈良公園の飛火野にある樹齢100年のクスノキと、千年以上前から棲息する神鹿を描いたものです。

脈々と続いてきた奈良公園の植物、動物の命の尊さを表現し、これからも気候、環境、また醜い戦争などにより、安らかな自然が壊されることのないようにと危惧しています。

描きながら、どうぞ未来永劫、命脈を保っていただける地球でありますようにと、心からの願いを込めました。



「いのちながるる」日本画 F100 2023年

立川 洋

「時間」や「存在」をテーマに、年号と日付を画いた河原温(かわらおん)。黒ベースに綺麗なゴシック体で1枚1枚作成した彼の考え方が好きで、その影響を受けて画きました。

ショックを受けたその日の出来事(絵画・彫刻等、街で出会った事)を日付を記憶しておいて、その日の朝日新聞の第一面をシルクで印刷して、その上にトップニュースとして扱って作品にしたのがこの画です。



「2017年4月27日トップニュース」シルク印刷・リキテックス 84×64cm 2017年

青木 園

私が東京展に初めて出品した年が2005年でした。油絵から出発、次にアクリル絵の具を使用、2012年二つの宙で優秀賞を受賞、その後墨で宙を表現したくなり、水墨画を初歩から習いました。2015年頃から墨を使った作品で、海外出展も多くなりました。来年は米国ニューヨーク市立大学のグループ展に参加、2点が収蔵される事になりました。その間東京展にも出品を続けております。今年で東京展が50周年、初期の自由で時代に果敢に挑戦する精神を忘れずに続けて行ってほしいです。



「宙に咲く椿」和紙に墨 M30号 2023年

竹中 芳利

20数年前に東京展幹部の久田弘氏に推薦されて出品しています。公募展に出品し自分の作品が展示されるのが夢でした。東京展の自由闊達な画風に憧れており実現し大変嬉しかったです。転勤族で福岡・名古屋・大阪・宇都宮から出品していました。大阪時代に京都・奈良の多くの仏像を観て感動し、これが現在の絵の基本になっています。各地の仏を意識したドローイングを徹底して行い、独自の空間になるべく描いています。尚、第40回「いにしへの夢家族」にて奨励賞を受賞いたしました。今後も独自のスタイルで仏画を主体に描いていきます。



「いにしへの夢家族」油絵 227×182 2014年

中 茂

すべては落書きから始まった。子供の頃、夢中になれた事... 思い起こせば折込みチラシの裏面やノートの片隅に鉛筆やクレヨンで落書き(?)していた事くらいしか思い浮かばない。子供なのだから様々なそれなりの体験はしているのだけれど特別強い印象としては残っていない。50才代半ばで描き始めた油彩画も善く善く見てみれば落書き(?)の様に観える! 現代の絵画も原点を探れば古代壁画や洞窟画辺りなのだろう。結局は私の絵も無意識的にその古代人の想いを受け継いでいるのかな? と、考えてしまいます。ナスカの地上絵等からも説明のつかない何か?を感じてしまいます。



「ミステリーサークル (彼方からのメッセージ)」油彩画 2010年

土谷 京子

アイヌ文化に関する新作を、との声かけをいただき制作。十数年前にアイヌ文化の伝承活動を行う女性 (UTAE さん) に誘いを受け、野外イベントに参加。特に印象深かったのは、若い青年の狩の踊です。あの若さと真剣さをどうしたら絵に取り込めるのか、和紙を選び切り進めました。獲物を戴く時の感謝と祈りでしょうか。若く力強い緊張感に挑戦するのは初めてです。縁あって共にこの星に住む私達すべてが穏やかな時をすごせますように、優しいものや、可愛い作品の制作も大好きです。



「若き狩人 (二)」和紙 72.7×54.5cm 2023年

山崎 仁

tomorrow

明日は明日の風が吹く

風が吹く

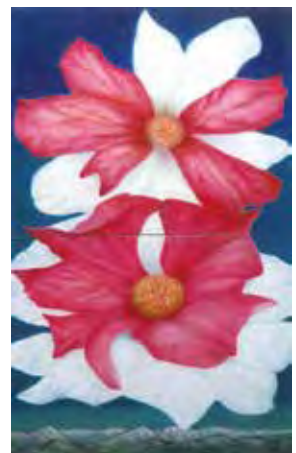
だから面白い。



「tomorrow」紙にアクリル絵の具、墨汁 縦110cm 横65cm 2014年

小山 善之

美術の祭典・東京展へは、第38回=2012年に初めて出品しました。退職(60才)後、カルチャーに通い、絵を始めてあちこち迷いながら16年経って居たのです。数年前スケッチ会に参加した際に、風景ではなく足元の水辺に咲く「アイリス」の美しさに魅了され、以後花束や花瓶に差した集合体ではなく、花一輪を大きく描く様になりました。この作品は第49回展(2023年)に出品したものです。「サザンカ」は冬の花なので、背景遠方に冬山を配してみました。



「サザンカ」160×100cm 油彩 2023年9月

Maho

この作品は私が体調不良を抱えながらも、自分自身の内面と向き合い描き上げたものです。JR博多駅前の大型ビジョンで展示されたこの作品は、単なる視覚的表現を超え深い意味を持ちます。VISIONという言葉には、視野、洞察、未来像、幻想など、多彩な解釈が可能です。私は、幻影にとらわれず、幻想を現実に変える力を信じています。この作品を通じて、私たちは自分のVISIONをどう形作るか、どう共有するかを問いかけます。あなたにとってのVISIONは何ですか?



「VISION」デジタルイラスト 2022年

小川 めぐみ

初めて飼った犬の「ジョン」家族も犬を飼うのは始めてで、飼育本を見ながら探り探り育てていました。

その本の中に悪い事したら、新聞紙を振りかざす事と書いてありました。後から、それは絶対にしてはいけない行為だと知りました。ジョンは怖かったのでしょうか。威嚇するように、家族を噛むようになりました。由一、噛まれなかったのは私だけだと記憶しています。

ある日、私が悲しくて泣いていると悲しい顔を一緒にしてくれました。あなたは、いいこ。そうさせたのは人間です。あなたはやさしい、いいこです。そんなキモチを描きました。



「JHON」油彩 S40(100×100cm) 2022年

maritsuzuri

私が尊敬しているのは猫です。

これまで出会ってきた猫たちに、生きることをたくさん教えてもらいました。等身大の自分を表現し、背伸びしない自分の作品は、猫の生き方から教わったものです。

みんなというようで、ひとりです。ひとりであるようで、みんなといいます。そんな生き方がおもしろいです。いろいろな生き方を、自分なりの生き方を、猫の姿からたくさん学びます。猫たちにたくさん助けてもらったから、作品は猫たちに向けてのラブレターです。

愛をこめて「いのち」を描きます。



「いのち」アクリル画 A4 2022年

小杉 智代

地球は全て知っている。太古から現代まで、人類が、人間が何をい地球を汚し破壊してきたのかを・・・。

人間が地球にとって又地球上の全ての生き物にとって最大の害となる生き物にならないことを切に願う。

この思いをもとに制作意図とし、表現を追求し続けている。表現することは自身の魂を磨くことだと思ふのだ。



「久遠」油彩 縦 112cm×横 291cm 2022年

多久 薫

この作品を描きはじめる前に勤めていた広告代理店が倒産し「人生、何があるか分からない」と思っていました。

そんな時に出会った

「memento mori」=「人は必ず死ぬことを忘れるな」

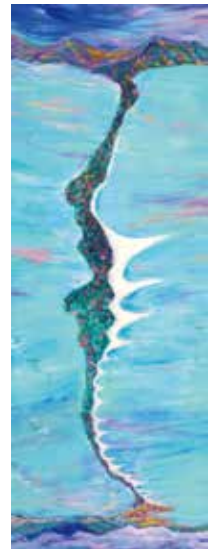
という言葉は、軽い音感で奥深い意味があるのが面白いなとつけたタイトルでした。あれから6年という月日がたち、感染症が世界中を蹂躪し、まさに「memento mori」だと思っていたところ、何かのゲームに「メメントモリ」が名付けられ、テレビで連日連呼されているのが「あらあらあら」という感じです。



「memento mori または 再生」アクリル 100号 2017年

久野 良一

二点透視図を90度垂直方向に回転した垂直遠近法というアングルで取り組んでいます、上方向をイナバウアーパースペクティヴ、下方向を股のぞき遠近法と称しています、日本三景の天橋立をモチーフに作者自身が股のぞきした目線で描いています、イグノーベル賞で発表された股のぞき効果（遠くのもの接近して見え平面的に、色彩は鮮やかに）空間知覚の変化を実感しました、俯瞰的に描くより連続した白洲の面白さをねらってみました。



「天橋立股のぞき」油画 横 113cm×縦 300cm 2023年

K.YODA

近年の夏は子供の頃に経験してきた夏と違い、とんでもない位暑く、この思いを、昼間と夜とを同時に描きたくなりました。

日中はギラギラ、夜には煌びやかな星空、花火、都会のネオン。

そんなイメージで描きました。



「真夏の夜のレインボー」油彩画 1450×980cm 2022年

井上 千鶴

東京展も半世紀を迎え感慨深いものがあります。初めてよくわからず出品したにも関わらず受け入れてくださった会の懐の深さに感謝しています。

当初は、オレンジを基調とした作品を作っていましたが、現在はプルシャンプルーを基調とした作品に変わっています。でも理想の女性像にはまだ遠そうです。



「詩(うた)」油 F20号 2017～2018年頃

林 晶子

ガラスに魅了され制作を始めて40年余り。主な作品はステンドグラスパネル、厚手の透明なガラスによる積層作品等。常に心地よいラインで心象風景を表したいと願う。粉からガラスを作り変形させ絵を描く。東京展ではガラスの質感と性質を利用し自由に瓦、木、ワイヤー等異質の素材との組み合わせも楽しむ。時間をかけて見ることでこれらの作品と対話し、新たな発見の意外さを提案したいと思う。一昨年、軽井沢町に作品とガラス技法を展示するギャラリーを持った。ここでの来場者の方々の滞在時間の長いことをとても喜ばしく思っている。



「垣間見る歴史」ガラスパネル 80cm×70cm 2021年

松尾 萌

キラキラと輝く船で旅をする、家族や、家族のような仲間たち。船に立つ色鮮やかな大木は彼らと一緒に成長し、空には妖精たちが航海を見守ってくれています。大切な人との人生を重ね合わせながらご覧いただけたら嬉しいです。



「ファミリア」色鉛筆 18×24cm 2021年

永松 ちどり

一心が動くということー

私の住む上越市猿供養寺の近く別所には、飴地蔵尊が祀られているお堂がある。六十数体もの小さな地蔵が並んでいて、どの地蔵の口元も黒い。奇妙で摩訶不思議。酷しい生活の中で我が子が無事に育つよう、多くの人が、地蔵さまの口に水飴を塗ってお参りするのだそう。

絵を描くたびに、自問する。何を描く。なぜ描く。近頃祈りのかたちに心が揺さぶられる。良い絵が描けるだろうか？それよりも心が動いたその事が、何か凄い事を発見した気持ちになった。



「別所の飴地蔵」アクリル F20号キャンバス 2023年11月

ギョーマンちめこ

東京展絵本の部屋に1986年、武藤順子氏のご縁で初参加し、以後今のところ皆勤しています。

絵本大好き人間ですが、児童のための本はつくったことはありません。作風はおバカ本。生活の中の不要品や言葉の不要品を集めて笑いとばしています。



榎本 典子

水面の流れや輝き、水中の生き物に心動かされることがあります。この作品では集合体で泳ぐ魚の動きや海水自体の流れ、さらに水中に差す光の美しさを意識しました。描きながらこんな感じにしていこうとどんどん考え方が変容し、短時間で一気に仕上げました。絵は描き終わった後も、見る人の心によって感じ方が変わりますが、この絵はいつでも私の絵としてなぜか受け入れることができます。タッチや色味や単純化したサカナの形が気に入っています。



「遊々II」アクリル画 F4 1992年

橋本 虹子

私は“旅”が好きだ。中でもラテンの世界(スペイン語圏)です。風景と共にオレンジ色の屋根に白い家が片寄せ合う集落、統一された色彩が自然の中で美しく、絵心を誘う。

1973年、初めてイスラム世界のトルコを訪れた。5月のアナトリアの大地を描いたのがこの作品です。これまでの具象画から削げる物があつたのかもしれない。この事が東京展での30年間以上の大作出品につながっている。しかし残念なのは、49回展後に頸椎と腰椎を痛め、通院とリハビリデーサービスなどに励む毎日です。50回展に向け、頑張っています。

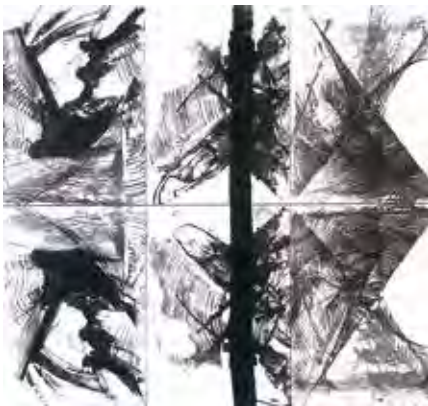


「アナトリアの春」1973年

武藤 順子

東京展の第2回展に絵本の部屋が新設され、48回参加しました。絵本の絵やさし絵を描いていましたが、もっとのびのびと自由に描きたくなって31回展から「飛翔」を出品しています。

鳥のようにはばたく飛翔です。この作品は49回東京展に出品した三部作の1点です。



飛翔 145.6 × 154.5cm 墨 2023年

しのはらはれみ

30年前に勧められて絵本のために木版画を始めました。その木版画に助けられて絵本を作り続けています。

この作品のタイトルは「夢がかなうなら」初めて絵本ではなく版画で賞をいただいたものです。

いっぱい楽しい夢を持ちながら自分のペースで、これからも絵本をつくっていきたくと思っています。誰かの大切な一冊になることが出来たら幸せですね。



「夢がかなうなら」水性木版画 240mm × 175mm 2018年

森 弥栄子

NICAF 出品の為、制作に追われていましたが、大きな作品のワキに置いてあつたパネルに、何の計画も無く、ふと描いた作品です。好きな作品ですが、今は私の手許にありません。



「ゆく夏」アクリルガッシュ・紙 40 × 60cm 1993年

石田 広夫

1990年頃から、女性を、仏・女神として、描き続けております。

デカダンの美を追求して、制作しており、生や死という感覚的対象を記号化し、精神的事象を現出させる力を、物的対象に変化させて表現しております。

今後も、自分の絵を追求してまいります。



神谷 伸一郎

私は原始美術に惹かれます。

その当時の人々の心に入って行けるので。

昔、たまたま訪れた博物館に鋭利なもので動物が描かれた土器が展示されておりました。一筆画の動物の絵。飾り気のない静かな線で。その線はどこから来たのかな。人って口では何とでも言えますが、体は正直。私にとって自分の絵は本当の自分の姿。私の絵、皆様はどう観ているのでしょうか。



「空の花筏」162 × 91cm 木の板に油絵の具 2023年

大島 進

◎私の絵を描くときの心得：

- 一、大きく捉える一鳥の目で観る。
 - 二、細部を捉える一虫の目で観る。
 - 三、流れを捉える一魚の目で観る。
- 以上



「形の不思議〈鳥の歌〉」116.7×182cm 2018年

中島 智子

幼き日のXmasを想うと美しい街の灯がキラキラと煌めき夢の中にいるようで大好きな祖父と手をつなぎ私は嬉しくて、くるくるとスカートの裾を回して踊るように光の街を歩いた。どんなに辛い事があったとしても人は幼い頃に一人でも本当に自分を愛してくれる人がいたら心はけして曲がったりはしないのだよ。だからおまえは大丈夫。祖父のくれた魔法の言葉は愛と光を伝えたいと絵筆を持つ私の大切な糧と成りました。この作品は祖父との思い出と近年の街の灯の情景を描いた作品です。



「Xmasの灯」F8 2018年

ゆりちゃん絵画

自由な発想と色彩・ゆりちゃん絵画空想印象創造の中に私がいる。画面に対峙した永い時間からの私法。各作品は時に明るい色彩、時には暗い色彩古典色と仕上げ。この作品は後者。銀座に初出品した作品。既にこの作品のタイトルすら、記憶は何処に。今から探してみよう。無となって。



『?』ミクストメディア 48×25cm 2005年

みなみじゅんこ

絵本制作に入ったばかりの私は、書籍で知った武藤先生にお会いすることが叶い東京展に恐る恐る人生初の絵本を搬入しました。そこで味わった表現の楽しさと一冊を仕上げる充実感。それから今日まで自分の世界を探し求めて制作してきました。

都美館で開催される東京展の絵本の部屋を、今回はじめて外側から見つめてみたら個性溢れるそれぞれの一冊が瞬く銀河のように思えました。私も自分らしく輝く一冊を作りたいと思います。50周年に感謝をこめて



絵本「月とまんぼう」より

堀井 武彦

2002年に初めて沖縄を旅行して、そのゆったりとした空気感と時間の流れに魅せられてから毎年沖縄を訪れています。本作は2017年に訪れた粟国島(あぐにじま)の集落の風景です。沖縄本島の北西約60kmの海上に位置し、人口約900人。那覇市の泊(とまり)港からフェリーで2時間10分かかります。開発が急速に進む沖縄では、この絵のようなゆったりとした場所は、離島に行っても少なくなってきました。また、天候に恵まれないと観光ポスターのような日差しにも出会えません。本作は、旅行の絵日記であり、私の夏の原体験の検証でもあるのです。



「夏時間 2021(粟国島)」油彩 91×71.7 cm 2021年

西浦 絵理

水、ひかり、影、空気。すべては動いていてとどまることはない。ただ、そこにある。かたちあるもの、ないもの、すべてに宿るいのちは、それぞれが尊くうつくしく、そこからたちあられる一瞬一瞬に永遠をみる。ことばにもならないけれど、私の内にうつるもの。そして同時に、私をうつすもの。



「うつる」アクリル絵の具、墨、紙等 145.5×145.5cm 2023年

財前 みつこ

貼りうりはべり今ぞ有り。スチレンボードを切って切って、小さな正方形の和紙を貼って貼って貼って、貼り終わったら組み立てて、ひとつの作品に仕上げていく。どんなジャンルと問われると困ってしまう。人生に正解は無い様に「枠」を決めることは難しい。「枠」やら「額」やら「組織」やら有るとその中は守られている気がする。だから楽なのかも知れない。だけど時々窮屈で、こぼれてしまう事も大切だ。当該作品にて2011年第37回展に於いて優秀賞を拝受致しました。何故か「立体」では無く「絵画」での受賞でした。後から漏れ聞きましたら開封時に「壊れてる!」と思われたとの事、有難くてイトヲカシ。



「こぼれる」

浜屋 芳悦

1995年に発表した作品。鉛筆の原画をもとにスクラッチボードに電動ルーターで削った線を彩色して制作。

発表の20年前に山藤章二の似顔絵に応募しようと一筆画のアイデアを得、以後人は顔の表情に表れた感情をどう記憶し、その人らしさを感じているのかという、肖像画にまつわる核心的問題を考え続けました。発表当時、紛争の最中であつたクロアチアの方が、このような作品を評価してくれて、そのことの意味を今も考えています。



「笑う少女」スクラッチボード、色鉛筆 30.5 × 22.9cm 1995年

田所 一紘

19歳の時に描いた自画像。やっと中間色の扱いが分かってきて、絵にのめり込めるようになった頃の絵だ。絵の具を何層にも盛って、ナイフで削って、何日も何日もかけてゆっくり描いた。

この絵はずっと手許にあって毎日見てきたが、40年経って分かった事。それは両目の違いである。向かって左の目は、常に〈今の自分〉を見ている。「現在のあなたはどんな人間ですか?」と。しかしこの妙な右側の目は一体どこを見ている? それ分かったこと。この漆黒の眼は、未来の私を見ているのであつた。常に私の未来を照射し続ける……。



「自画像」油彩 F 6 1982年

大洞 志保

コロナ禍により初のweb展となった東京展での出展作品「nou」です。私の脳で突然に埴輪の頭を開けてみたいと考えまして、ぱっかり開けてみた所やっぱり脳はないので作って入れてあげました。私がやりたいようにやった作業をwebで見た方が家族みんなで笑ったなどの感想をくださり。大変な時期でしたが人を笑顔にできるならアート活動を止めてはいけないと心強くなれた作品です。



「nou」陶器 100 × 25 × 20 2020年

田代 りえ子

東京展に出すようになって14年、がむしゃらに描いて来て昨年の会員企画展でずらっと並べたら毎年毎年を頑張ってきたと心から思いました。出し始めた頃は自信がなく合わないなら退会しようと思った時もありましたが今では打てば響くように努力を認めて貰える頑張り甲斐のある場です。

己で挑んでいかねばならない東京展の緊張感の中、でもそれはとても自由な事。これからも大いに愉しみながら精進して参ります。



「LIVINGTHINGS2018 アマゾン川」水彩画 182 × 273cm

山下 晃伸

東京展に発表を始め、今回で9年目になります。

同じタイトルでの発表を続けてまいりました。

この作品はコロナ禍の中でも新規の恐竜増やし続けていた栃木県の公園を応援したく撮影しに行きました。

これからもこの様な作品を発表し続けたいと思います。



「夜光性静物観察記」写真・銀塩デジタルプリント 1400 × 1100mm 2013年

小材 雄英

この絵は京都府南丹市美山町にある伝統的建造物群保存地区内の山側に建っていた小さな茅葺き民家である。確か、12年前に京都市桂駅から臨時バスに乗り、約1時間半。山腹に建つ茅葺き民家群は、今まで見た事のない風景であった。

この絵の古民家は東にガケのある高台に建つ小さな民家で、冬にそなえてトタン屋根の小屋に薪を積み上げてある。西側のガラス戸に、斜めに建てかけたトタン板は、冬に入りする為の雪よけの板であろう。



「美山の民家」水彩画 F3

藤谷 美貴雄

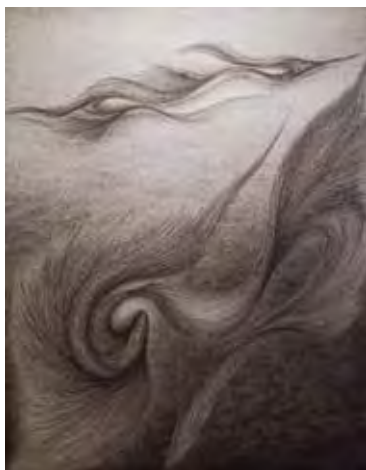
いつもながらエイリアンはなかなか可愛い。これで大空を羽ばたき日々を過ごす。そして時には弾丸の如く青空を突き抜ける。そしてまた時には大酒を飲み歌い踊る。エイリアンだからそんなものだ。いつもはそうだが。今日は静かにゆっくりと歩き静かにゆっくりと酒を飲む。そうだ。今日は「静かなエイリアンのための酒場」へ行こう。そこは深山幽谷の酒場だ。深い雪をかき分けて行けば暖かい囲炉裏もあり。全てが素敵に暖かくなる。



「赤い頭部のエイリアン」半光沢紙(デジタルプリント) B0(103cm×147cm) 2024年

多田 吉民

2023年の2月に体調を崩し、半年間の入院による治療、リハビリの後に描いた作品です。2023年の東京展の本展には間に合わなかったのですが、12月の個展で発表しました。これからは少しでも身体の調子を良くして描き続けていきたいと思っています。復活へ向けての一作です。



「かげ」ボールペン KMK ケント紙 木製パネル 縦 1167 ミリ横 910 ミリ (F50 縦位置) 2023年

山根 到

1978年カナダ遊学中に恐竜の宝庫、アルバータ州立恐竜自然公園での生の恐竜化石にヒントを得て開発した画材パドリング。生命はいつかは滅びるが、恐竜の骨は何億年も残ってる。そのような絵を残したいと、レリーフ状に作成した絵画で独特な表現が持ち味です。インク溜まりと云う意味でパドリングと命名しました。朝晩の光と影の変化を楽しんでいただける作品です。画材を活かした水の流れる美しさを表現したいと現在格闘中。



「ロコモーション」素材、パドリング+アクリル 100cm X 710cm 2019年

小川 裕司

ネパールの古都バクタプルを訪ねたことがあります。中世の町並みをそのまま残す美しい街で半日ぼーっとしていると時代も場所も超越した異次元の世界にいるような気がしました。日本に帰ってからバクタプルのニャタポラ寺院で撮影した写真を眺めていたらそこが異界への入り口のような気がしました。東京で日常的に見かける人々の後ろ姿を写真に配置してみたくなり作品化しました。涅槃に至る道は淡々として静かなのだと思います。



「¿A dónde vais? (あなたたちはどこへ行くのか)」 24cm×24cm 2023年

たかのさき

京都 宇治市 宇治川には伝説があります
男女で手に手を取って道行きの中 宇治川を舟で渡る時 波が強くなり 舟が揺られ転覆 女性は手に手を取り水の中でも手を離さずに一緒と思っていたら男性は女性の手を離し自分だけ逃げました
女性は水の中へ沈みましたがその後 川を渡る男女には川底に居る 女性が大きな波を起こし 2人の愛を試します 後に川底に居る女性は [橋姫] と名付けられ今でも川底で男女の愛を悲しみながら愛を試します



「橋姫」豚生皮と混合媒体技法 1500mm×1500mm 2019年

上田 玉青

空気と、命の時間を
色彩で表現出来たらと思い描きました。



「rain」油絵 F80号 (1455×1120) 2023年

荒木 一男

この作品は、第10回全日本アートサロン絵画大賞展で優秀賞を頂いた作品です。当時は、子育て・親の介護・仕事と、絵など殆ど描けない時期でした。そんな中で希望となった作品です。その後、東京展と出会い自由気ままに自分の作品が描ける事に変感謝しております。

今後は、具象画だけでなく抽象画などにもチャレンジしつつ余生を過ごしていきたいと思っております。



「静物」油絵 F20号 2001年

石塚 亨

東京展に初初めて出品し、奨励賞をいただいた作品です。ぼかし技法ができない、絵の具の伸びがなく被覆力が弱い、厚塗りができない、と一見欠点も多い技法のため、15世紀半ばに、よりリアルな陰影や物の存在感を描くことができる油絵の具にその座を奪われてしまったテンペラ画ですが、まだまだ表現の可能性を秘めた技法だと思っています。これからも新たな表現に挑戦していきたいと思っています。



「悠」卵黄テンペラ F10 2011年

加賀美 裕子

絵本を製本する時、本文紙をかがるのに糸を用います。ぴんと張った糸の姿の美しさに感動し、糸で絵を描くようになりました。無心でちくちく針を運んでいると、自分の心の世界が糸の線で表れて来ます。以来自分捜しの旅を楽しんでいるのです。



「いとをかし」糸、石 20×20cm 2023年

今井 正明

東京展初期、うる覚えだが、5回展だったか私が25歳頃出品した作品を再度作り直し2014年40回展に出品しました。当時太宰治の小説パンドラの箱に触発されて制作しました。それから半世紀世界中の情報が安易に知り得る昨今不安、混沌、混濁、危機感はずばかりです。



「パンドラの箱」ダンボール、紙、布、彩色 200×200×200cm 2014年再制作

山口 通三

若い時から造形とは何か！線、形、色、想いで何を表現するか
この宇宙で、現在生きている。見えないものをピュアな心で捉えて自分の宇宙空間を作りゆけるか、どうか
毎日、ワクワクして考えたり、描いたりしています。



「宙の悲」182×182cm キャンバス、アクリル絵の具 2022年

板橋 敦子

寒くても元気な女の子を描きたかった。



「さみさみさみ」水彩画 22 × 15cm

松下 玲子

この作品は東京展に関係なくポエム展に出品した作品です。大きな石積み階段 勾配もきつい 相当古いに違いない。あの大地震で土がはみ出し 小さな花が咲き出した カラーミント アジアンタム タツナミ草 ハコネシダ スミレ タンポポなど / さあ 気をつけて降りなければ / 空が動く 山も動く 風も動いて トンパ文字表われ 雪やひょうも降る それでも果実は実り 鳥の声する 草や花 虫の声する 夫婦が地に種をまく 天に向かって矢放たれ さあ 気をつけて降りなければ



「石積み階段」46 × 60cm

田山 智砂子

生きるという事は素晴らしい事もあれば厳しい事でもあります。一言では表現出来ませんが、私達は色々考えるものです。先日の石川県の地震は町の復興と皆様のご健康を思うばかりです。



「生なるもの」布キャンバスにアクリル絵具 F10 号 2023 年

MOTO

画面下方の方形は、地球の一端を表わしている。

四角は地球の断層であり、ここに生きてきた想念が積み重ねられている、喜怒哀楽であり方形、三角錐ほか様々な感情が立体的形式にこめられています。喜び、悲しみ、無関心など、心奥の思いが形となった心の襞（ひだ）です。おのころ日輪は「日の本、ニッポン」を表わし、或いは私の心の「ひだ」である。



「おのころ日輪」162 × 130cm 2018 年

すげの でんじゅ

おだやかな日々を願って、少しずつ描いて行きました。



「花」アクリル F20 号 2012 年

大澤 満紗

キャストイング技法によるガラス作品の、白と透明な光が織りなす朧で儚い質感に魅了され、敢えて色を使わずに、インサイド・レリーフで情景や物語を描くというスタイルで制作をしています。

当作品は旧約聖書によるバベルの塔の神話からインスパイアされたもので、傲慢さから共通言語を奪われた人々に広がる情景を幻想的に描きました。



「the tower of Babel」ガラス 400 × 250 × 50mm 2022 年

紙細工ひこかみ

偉大なる東京展、記念となる50周年おめでとうございます。東京展にはじめて伺った時は、憧れの小松崎茂先生の戦艦大和の原画に感動して、釘付けになってました。それから、年月が経ち神戸で、関西展のお手伝いや参加させて頂く今年となり10回の開催の間、諸先輩方々から沢山の事を学ばせて頂きました。自身の作品の段ボールの組み立てシーサーですが、度重なるお披露目で少しずつ変化して参りました。東京展では、ふたつもお披露もさせて頂き皆様から暖かい応援のお言葉も頂き大変嬉しく思っております。感謝を込めて自身、今が始まりの気持ちで日々の活動も作品づくりも精進して参りたいと思います。



「段ボール組み立てシーサー」素材、AB/fフルート段ボール W1680H2850D2600 2023年

荻野 利智子

私が若い時、ある先生のおすすめで初めて写真の個展をする事になり、活気のあるベトナムを撮りたいと思い、一人で一ヶ月ベトナムを旅しました。想像以上にエネルギッシュで人々は生き生きとしていた。私は夢中になり村々で町々でシャッターを押しつつ歩きました。この作品は・・・大型バスで移動中、朝が明け始めた時刻、ネムい目を通してレンズをずっと見ていた私に入り込んで来ました・・・反射的にシャッターを押していました。今でも、朝日を受けて仕事に向かう婦人の仲間達の、さわやかな笑顔が心に深く残っています・・・私にとって忘れられない作品になりました。



「朝日を受けて」パネル(写真) A3 1997年

Myles Wilmott

モデルと花をテーマにした写真をセレクトしました。この作品のコンセプトは、写真ではなく絵画を見ているかのようなイメージを表現することです。私はスタジオで、かなり古典的なパターンの茶色の背景、シーンを照らすために使用される照明の組み合わせ、およびカメラの設定を使用して、これを実現しました。写真撮影終了後の後処理作業の量を最小限に抑えるために、私は常に自分の望む外観をカメラ内に収めるように努めています。ただし、この画像では、肌を明るくし、目を強調するために、Photoshopで2つの「カーブ調整レイヤー」を使用して微調整を加えました。



「フローラル スタディ 01」写真 44x32cm 2023年

中川 むつみ

これまでの作品の中で最もお気に入りの「環境密閉装置V」は今はもう無い。出品前自宅の庭に置いて、夏の草木を映し込んだ写真が遺影となった。実は会期後、地元の公民館に展示した際、午前中当番の方から電話があり壊れたとの話。駆けつけると無惨に崩壊していた。どうも清掃員のかたが謝って掃除機のコードが巻き付いたまま引っ張ってしまったらしい。開館前の事で事情の分かる人は居なかった。悔しい思いをしたが、展示に耐えられる強度も作品制作には大切な技術だと思い知った一件であった。



「環境密閉装置V」アクリル板、レース糸 30×30×120cm 2003年

青柳 芳夫

1993年から7年間、エッチング作品を画廊で発表しました。その後美術の祭典・東京展には油彩画を出品しています。最初期は群像表現でしたが、この作品で“物語”を表現するようになりました。その意味において、重要な転換点となった作品です。



「ドラードマップ」油彩 194×324cm

鈴木 憲治

想いを伝える手段として油彩画に惹かれ、人物を主に描き続けている。業というか、エゴというか、人間は美しいものであると思い、どのようにも表現できるかは毎度身悶える課題。心落ち着く、時間がゆっくり流れる、陽光差し込む室内。人が生きる世界。映り込んでいる鏡の向こうの世界は、真実の世界か。見えているようで、見えていない世界なのか。ふと、今この瞬間、自分自身に問い直してみることが必要ではないだろうか。その、想いが伝われば、幸いでありませう。稚拙ながらも日々水滴石穿。



「ON-NA 2018M」油彩、キャンバス F50号 2021年

山下 清明

この作品は、夏の暑い季節、高原を旅したとき、森林を通り抜けて突然出会った景色の印象を表現しました。ステンドグラスのパネル作品は、裏側からの光が透過して見せるガラスの色合いと、室内の照明を受けて見る色合いとは、全く異なる表情になります。また、外に面して設置された場合、透過して取り込まれる外景の季節の変化や、朝、昼、夕など、入り込む光の移り変わりで印象が多様に变化して大変面白いのです。展示会場では難しいですが、この作品は、フラットな光を裏側から照射しました。



「牧場への道」ステンドグラス 45×60cm 2020年

ごま猫屋

2019年 COVID19 で世の中は大きく変わりました。制限された日常の中でも変わらないものの一つでもあり、私の作品の基本テーマでもある(愛)をモチーフに編んだあみぐるみです。



「LOVE(愛)」毛糸、コットン糸 30cm 2020年

亀山 勝保

長野県の最南端天龍村坂部の諏訪神社では毎年1月4日の夕方から翌5日早朝にかけて「坂部の冬まつり」が奉納されます。4日夕方境内では大庭火が焚かれて数名の男達が伊勢音頭を唄い太鼓を打ち鳴らして祭りの火蓋が切って落とされる。夜どうし神々の舞が奉納され、5日の早朝6時ころになると祭りの主役「たいきり鬼」が躍り出て大鉞で松明を打つ。火の粉は舞台に飛び散り祭りはクライマックスに達する。人々はこの年の安寧を祈る。その後も様々な神々が舞を奉納し9時頃には「面送り」となり幕がおろされる。

祭りに登場する数多の面(おもて)に強くひかれ作品としました。



「神々来村」木版画 180×100cm 2009年

松本 ケイコ

COVID-19 感染蔓延による自粛で、ひたすら自宅に巣籠もりしていた時期。先行きの見えぬ不安な日々も、いつかは終わるといいなと願い、描きました。



「未来」キャンバス(アクリル画) F3 2021年

井上 利哉

源氏物語の抽象表現を思いついて、50年ほどになりますが、大切なことは、物語性を排した1つのタブローとして男性と女性の心の奥底にせまり、想像豊かに抽象(空間)表現を試しています。



「源氏絵(六条院)」キャンバスに油絵 F100号 2018年

ナンシー

世界中で戦争や天災の続く中、夢と希望を持って生きていきたいと思って制作した。



「パラダイス②」アクリル画(発泡スチロール) 直径130cmの円形 2023年

IKE

登竜門を駆け上がってくる鯉たちをたつこの太郎と伴走の竜たちがはやし立てます。

「昇れ昇れ！みんな竜になれ！」

辰年の年始に描いた作品です。勢いのある50周年となりますように。



「登竜門の辰ノ小太郎」透明水彩画、水彩紙、30 cm×40 cm 2024年

古川 玲子

東京展の創設者中村正義さんは昭和の時代、水墨画家で正義さんの友人の山本正雄さんから正義さんはキリストの再来と言われその才能は日本画の風雲児と呼ばれたと聞いていました。中村正義記念館が私の家からすぐの川崎市麻生区にあり何度か見学に行ったこともあり、平成の時代ちょっとしたご縁で東京展に日本画で出品することになりました。個々の理想の芸術を目指す同じ仲間という意識が高く自由な気質の東京展はこれからの令和の時代の団体展だと思います。



「精霊」日本画 F120号 2022年

織田 泰児 F

50年前に、フランス美術賞展に入選した作品。日本のみならずパリでの展示もあって、私は新婚旅行を兼ねてグラン・パレに自作を見に行きました。ジャクソン・ポロックに触発されながらも、それを越えようと、「垂らす」のみならず「流す」技法も加えたら、東洋的な風景画になりました。大自然の現象世界が、私の絵画の中に相似形として現出しているのが分かりました。私のスタイルである『自然造形絵画』のきっかけとなった作品です。



「四季の移ろい」アクリル F60号 1975年

とのむら茂一

僕が20代前半の頃にととてもお世話になった〈戸島 真由美〉さんを描かせていただいた作品です。脊髄小脳変性症という難病と闘いながら命を輝かせた戸島さんに、完成した『生きる』を見ていただく事は叶いませんでしたが、『生きる』で優秀賞を受賞させていただき、「芸術の祭典・東京展」の会員になりました。天国から戸島さんが僕の絵画活動をいつも応援してくれている気がして、これからも命を輝かせながら、魂を込めた作品を描いていきたいと考えています!!



「生きる」水彩絵の具（アクリルガッシュ）F100号 2016年

会田 邦秋

「北海道のような、アジアのような、東京の一角。昭和の頃のような、でもどこか未来のような、令和四年時代と地域を超え、沈黙の日々が終わり再び日常が動く」



「東京 8.」インクジェットプリント A0 2022年

吉川 潔

「生きること」という大それたタイトルを付けた作品を創り始めて10年程になります。当初、自分に向けた激でもありましたが、国内外に目を向ければ、多くの災害、疫病、紛争等により、不幸にして人生を全うすることが叶わなかった人々を目の当たりにし、また、絶望的な環境の中でもたくましく生きようとする子ども達をはじめとした人々に思いを馳せながら未来志向の作品を創るようになりました。未だ生かされて、創作活動を送れる日々感謝しながら、木を削り、土をこねています。手と頭が動くうちは作品を残したいと思います。



「生きること」檜他木材、プラスチック素材 高さ350×幅180×奥行100cm 2022年

佐藤 ゆかり

マーガレット・マーヒー原作の同名短編を絵本にしました。原画は自分の銅版画を加工して使っています。

絵本制作では自分の版画や自分で撮った写真をコピーしてコラージュすることが多いです。



「葉っぱの魔法」絵本 原画 170×120mm 2014年

糸桜 ゆかり

絵本の部屋に30年ほど前から出展させて頂いています。子どもに話して聞かせた創作話やエピソードを描きとめました。

今は孫たちのため、また、自分のふとした日常の思いを乗せて描けたらと思っています。



「夏の夜」アクリル絵の具 650×530

佐藤 環

東京展に参加させていただいてから、ほぼ息子の記録のような絵本を作っています。

子供時代から大人に向かう頃で成長を感じつつも、もっともっと伸びてほしいなど欲張りな願いがたくさんあったことが思い出されます。



「すごろく」ミュージコットン紙 50×50cm 2012年

藤井 光永

第30回から出品し始めて早20年、初めてカメラを触った大学一年生の私を暖かく迎え入れてくださったのは東京展の多くの先輩方でした。その優しさと想いを受け継ぎ、私もその東京展の歴史の一部でありたいと強く思うばかりです。日常から想起される抽象的具象の情景の断片。レンズを通すことで物が存在する確からしさがあり、その先にフラクタル理論を根底概念とした原始地球にあったような、宇宙の誕生に立ち会うかのような、そんな未知なる美しさが表現できるのではないかと探し求め、ただ、ただ写真を撮るばかりです。



「come away with me」デジタルピグメントプリント 1600x900mm 2021年

アマヌマ アキ

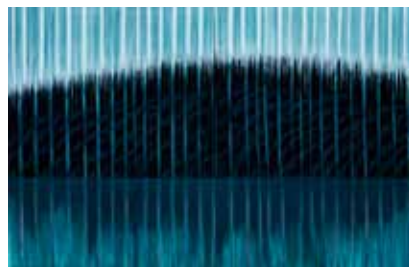
ステンドグラスの技法で制作しています。自分の今までの道のりを、5枚に分けて表現しました。



「道」ガラス、銅線、銅テープ、ハンダ、合板、ペンキ 1点 90×30×10cm (5点一組) 2023年

高倉 和郎

制作には長い間油絵具を使用してきたが近年喘息になってしまい、乾性油をあまり使えなくなった。特に下絵の段階で多用するので困ってしまいました。以前は冬でも窓を開け、寒い中で平気で制作をしたものだ。そのくらい油絵のマチエールが好きであった。続けるため、乾性油を控える表現にすることも検討した。しかし一旦身についた技法を捨てるのは忍び難かった。そんな折、出会ったのがアクリルガッシュという絵具である。使ってみると、私には、とてもしっかりときた。掲載の写真は、この絵具による初めての作品である。



「so it is.」アクリルガッシュ F100 2016年

福井 昭雄

作品は1966年頃、『植物的標識』として発表したもので、それまでの厚塗りの作品からぬげだし、アクリル絵の具による新たな手法によるもので、次への展開を見ることができた。



「植物的標識」F120

山田 實

私の作品制作は、全く単的な方法です。キャンバスに油彩を、種々の筆を使って、所謂「塗り付ける」と云う、全くオーソドックスな技法です。ですが、勿論、日本画ではなく、しかし洋画でも有りたくない。矢張り“山田画”で有ることを貫きたい頑固者です(2014年東京展目録より抜粋)



『左右の繋がり』油彩 F60号 2014年

日野 弘子

2021年、これが最後の個展になるだろうと思いながら、銀座の奥野ビルの地下にある古いギャラリーを予約しました。若い頃からずっと持ち続けていた「曲線を持つ形、がつぎつぎと表れて来ました。この作品は、気おわず、楽しみながら描いたものの一つです。



「作品 2021 - b)」リトグラフ 112×76cm

齋藤 鐵心

今から36年前。当時の西ドイツ西Berlinに在住して14年目。その時私は西ドイツ芸術村ヴォルプスヴェーデに招待作家として滞在していた。丁度デュセルドルフで市制700年絵画コンクールがあると知り応募した。テーマは《街》。1988年まだドイツは東西に分かれBerlinも然り。そこで私の線による画面構成でBerlin分断に応用出来ないかと制作。応募者600名超総点数1000点超、入選者26名。純抽象で入選は私1人であった。結果第2席受賞。1年後のBerlin壁崩壊を予感するまさかの1点となった作品。



「Wohin Woher Berlin 1988.」(ベルリンは何処から来て何処にいくのか1988)アクリル絵の具 165x140cm 1988年

津田 のぼる

環境を缶嚮造形と呼ばせ、私の缶もののがたりを展開しています。つまり、私の内宇宙の世界。それは空き缶が初めて生まれた200年前から、今日至る迄の世界を旅するものがたりでもあります。ピーター・ジュラン(空き缶の作者)を通じて、もしかしたら、未知の世界を旅しているのかも知れません。



「缶嚮アート」

山本 航介

五美大交流展で最初に出品した作品です。神戸の街と鳥瞰図が好きで、東京から通いながら描きました。手前にはポートアイランドや下町の海岸沿い、中心には六甲山をバックに北野町や三宮を入れました。絵を通して、描いてある場所に興味を持った、行った事を思い出して楽しんでいただけると嬉しいです。



「神戸・三宮」キャンバス アクリル画 P30号 2019年

忽那 真太郎

写真が趣味の友人に見せてもらった知らない土地のただの路地裏を撮った1枚の写真が印象的で、そこに想いを馳せたイラストです。私は1枚の絵に1つの世界とその住人を空想して描いています。台詞もないたった1枚1場面の絵に物語を描いています。見る人によって違う物語になるのでしょうか、やさしくてあたたかい物語であればと思います。ワトソン紙のテクスチャを活かし色鉛筆でやさらかに彩色しています。白色や消しゴムは基本使用せず、彩色をしない紙の地色が一番明るい場所とし、最初から計算された状態で彩色をしています。



「ロボットおまわりさん」ワトソン紙(ナチュラル)と色鉛筆(カリスマカラー) F3弱(縦273mm、横215mm)2016年

佐藤 純

裏表に平行線がプリントされた紙の帯の両端をつないで出来た二つのメビウスの帯をリンクさせたものを写真撮影。ページ曲線のような滑らかなカーブと濃淡の効果が目立ちます。Paper Worksという紙を使った作品シリーズの中の一つ。調べてみたら10年前に制作したと分かり感慨深い思いです。その後、サイズを変えて何回か発表しています。



「メビウスの帯」写真、ファインアート紙にプリント 30×30cm(最初のプリント)2014

斉藤 禮子

未熟児で生まれてから、暗闇でポツンと寝ている事の多かった私は、いつの間にか地面も無限の宇宙の中の1点と感じ、茫漠とした空間にただよっているという生存感覚になった。すべての呪縛から解放されたい 又、解放したい・・・・それがあんまり難しいので、目に見えるようにする・・・・描く、ということになるのだ。(1993年・紀伊國屋画廊での個展案内状の文章)



「宇宙音階」キャンバスに油彩 97×194cm 2003年

和田 廣司

和田廣司さんは、2000年に東京展に初出品され、その後およそ四半世紀にわたって東京展を支え続けて下さっています。厚く盛り上げたお椀型のマチエールが特徴的で、サイズもかなり大きく、東京展の性格を担っている作家の1人だと認識しています。テーマは哲学的であったり文学的であったり宇宙的であったりするも、スフィア=球体=根源へと向かうベクトルが感じられます。その作風も相まって、絵画の枠をはみ出た自由さが最大の魅力だと思っています。これからの展開も楽しみです。(田所一紘筆)



「スタンディング・ストーンA」164×132cm 2018年

山崎 彰紀

秋の色づき始めた銀杏の木をモチーフに描きました。木や植物を題材とした作品をずっと描いて来ています。木々の幹や枝葉の伸びゆく形が好きなのですが、それらが日差しを受けたときの色や枝葉から漏れてくる光に魅力を感じて表現し続けています。制作姿勢について、平凡なサラリーマンの私にとって時間に追われる日常の中で、見たものを描写するスタイルから抜け出せずに自問自答しつつ、描き続けることで見えてくるものがあるだろうと思い、何とか出展を続けさせていただいています。



「深まりゆく」油彩画 652×530 (F15) 2022年(春季展出展)

小堀 英男

東京展50周年お祝い申し上げます。東京展に参加させていただけることを光栄に存じます。教員をしています。コロナ禍でさまざまな制約を受けながらも、卒業した入学してくる子供達を励ましたいという思いから、吉野竜田図をモチーフに『桜』の図を制作しました。



「桜」ラシャ紙、半紙、画用紙、葉包紙、不織布、アクリル絵の具 366×185cm 2024年